

D - L E I P Z I G

# 第34回

# ヨーロッパ・キリスト者の集い

## 証と感想



### 信仰の音楽の素晴らしさ

安藤真菜

#### ミュンヘン日本語キリスト教会



私は今年集いで『集い実行委員』をやらせていただいたんですけど、ちょっとした事でも結構大変でした。小さい事でも家族で何度も口論になり、なかなか決まりませんでしたけど、神様が一つ一つ守って下さいました。口論中も自分の事ばかり考えて神様がついてくれているのを忘れていました。でも後々になって冷静を取り戻したら「あ～神様あの時どんな気持ちだったのかな」と考えました。きっと寂しい目で私を見つめていたに違いありません。

私は今回受付をしたのですが、345人(キャンセル者含む)の名前としおりに貼るシールを確認したり、託児をする人に紙を挟む作業をしたりしたんです。最初のうちは「あ、〇〇さん！」と考える余裕だったんですけど、だんだん疲れてきて早く終わりたいからチャチャッと済ませてたんです。神様は345人の参加者の1人1人の事を知ってるから改めて神様すご



いなあって思いました。

今回、分科会で『バッハ、信仰の音楽～ムシカ・ポエティカ』に出たんですけど、音楽の素晴らしさを改めて知りました。

例えば、『神はわがやぐら』の解説では、  
『神は私を守って下さるお方、私の強い盾。  
私が苦しい時、近くにきて助けて下さる。  
悪魔が私の力と知恵を利用し、誘惑してきても、  
私達と共に戦って下さる神様こそ  
万軍の主なるお方であり、神ご自身であられる  
お方です。主は敵に譲ることはありません』  
です。

その意味を知った時感動しました。本当に神様が私の事を守ってくれるんだなって嬉しくなりました。お祈りする時も今までは時間がなくて早口で祈って、神様から逃げてたんですけど、今年の集いで学んで、お祈りも神様とちゃんと向き合ってゆっくり心を込めて祈るようにしています。また、沢山の出会いもありました。来年も神様のご計画で行けるか分かりませんが、出会いを大切にしていきたいです。



## 信仰の仲間がいること

安味尚香

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

ヨーロッパ・キリスト者の集いに参加したのは2回目ですが、大きな集まりでユースリードという大きい奉仕を神様に授けて頂きました。準備の段階から家に帰って来るまで、どんなハプニングの中にあっても、神様の偉大さ、こんな小さい私をも用いて下さることを痛いほどに感じました。

また、同じ神様を一心に見上げる信仰の仲間がいることの幸いもひしひしと感じる4日間でした。

全ての行動においても、私が動いているのではなく、主が私の内で働いて下さっていることを実感しました。



## 心より感謝して

佐々木千恵子

シュトゥットガルト日本語キリスト教会

主を賛美致します！ハレルヤ！  
ミュンヘン日本語キリスト教会の安藤先生ご夫妻はじめ 高木さんご夫妻、実行委員の方々、メッセージの先生方、CS、中高、ユースやその他たくさんの方の尊いご奉仕に心より感謝致します。ありがとうございました！恵みに満ちた空間でした。

私は、たくさんのたくさんのお祈りに助けられおかげさまで健康が不思議なくらい守られ、主を崇め、感謝して帰って来ました。

主のお働きに感動しています。主を賛美致します。ハレルヤ！心より感謝して！



## キリストが内に生きる

森口洋子

工藤篤子ワークショップ・ミニストリーズ

日本の8月は、6日が広島原爆、9日が長崎原爆、15日が終戦記念日など、どうしてもあの戦争に思いを馳せ、平和についていろいろな思いを持つ月です。

マタイの福音書には「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子と呼ばれるから」5章9節、とあります。平和を祈り、願う心はどなたにでもあると思いますが「平和をつくる者」とはどのような者のことを言うのだらうと思います。

祈り、願うに比べて「つくる」と言うのは行動を伴うように思います。私なりに小さな小さな行動を起こして来たりもしました。

人の行動は人の心より発し、人の心は色々な欲でいっぱいです。戦争もこの欲から起こります。「キリストが内に生き」てこそ初めてこの欲に打ち勝つことが出来、これが「平和をつくる者」として行動させていただける唯一の道であると信じます。

ヨーロッパ・キリスト者の集い、以前から参加したいと願っていましたが、初めて参加する事が出来とても感

謝、感動しています。

お世話くださったミュンヘン日本語キリスト教会の皆様、高木さんご夫妻、ありがとうございました。また日本からの参加者の窓口になってくださり、毎年集いのお世話をしてくださっている工藤篤子さん、本当にありがとうございました。

H4ホテルでの3泊4日、みことばのシャワー、凄かったです。トマス教会での賛美礼拝、凄かったです。ライブツィヒ素晴らしい街でした。カフェバウムでいただいたお食事、モーツァルトと言うアイスコーヒーは素晴らしく美味しかったです。

ホテルまで私たちにあわせて移動してくださり、ドレスデンとヴィッテンベルクをご案内くださった工藤さんのご愛に心から感謝しています。

集いに参加されたヨーロッパキリスト者の皆様は信仰あつく、

結束が固く心から敬愛します。異国、異文化の中での暮らしは何かとご苦勞も多いことと思いますが、どうぞ主のお守りと祝福が豊かに豊かにそそがれますようにお祈りしています。

また来年持たれますイギリスのエディンバラでの集いが、どうぞ主の御名が崇められ、ご栄光が輝く時となりますように祈ります。



## 宗教改革500周年の年に

安藤廣之

ミュンヘン日本語キリスト教会牧師



宗教改革より丁度500年の年、2017年にヨーロッパ・キリスト者の集いの主催が出来ないだろうか、、、ミュンヘンに来て間もなく、私は考えていました。今思うと示され

たかの様に、と言えるのかもしれない。

しかし当時は教会と言っても開拓で私達家族+αと言った人数、とても単独では無理と思い、他のドイツの日本語教会へ「2017年は集いを共催しませんか」と呼び掛けたりもしました。しかし共催と言う在り方にも賛同が得ら

れず、結局は2014年の集いの代表者会でミュンヘン教会単独の主催として立候補しました。

今思うとかなり無謀な立候補でしたが、満場一致で承認して頂きました。その後、神様はミュンヘン日本語キリスト教会にある程度の人数と様々な賜物を持った兄弟姉妹を加えて下さいました。

勿論全体を通しては足りない所も多分にありましたが、今の私達としては精一杯の準備をさせて頂けたと思っています。本当に多くの先生方や欧州の仲間に助けられ、この集いが開催できましたことを心から感謝しています。



## 兄弟がひとつになること

今井朗

コイノニア福音教会

Stuttgart在住の今井朗です。今回の集いでは久しぶりに二人の尊敬する先生との再会を楽しみにして参加しました。まず、欧州の諸集会で何度かお会いしました坂野慧吉先生です。分団の「復活の主と共に歩む人生の旅路」にも参加させて頂き、導入として隣の方と人生の歩みの中での神様との関係の大切さを互に分ちあいました。そして、ルカ24章13-53章からイエス様の死によって希望を失ったエマオに向かっている二人の弟子に現れた復活のイエス様によって、ただ霊だけで無く、身体がよみがえった真理が私の人生を大きく変える福音であることを改めて学びました。



もう一人の先生は神戸から来られました橋本昭夫先生(神戸ルーテル神学校元校長)です。私の神戸にある母教会の牧師ご夫妻が神戸ルーテル神学校で先生から学び、結婚式の司式、並びに按手礼を橋本先生から受けられたことから神戸でお会いする機会がありました。

講演では、特にルターの「十字架の神学」を分かり

やすく説明されました。イエス様の苦難と十字架の中に神様の真理が隠されており、信仰の基盤である。それは信仰により苦難や悲しみの中に神様が居て下さる真理を知ること、苦難から避けられない人生の現実に向き合うための実践的な信仰姿勢であり、すべての克服する道を備えてくださる神様に信頼することを告白する神学と理解しました

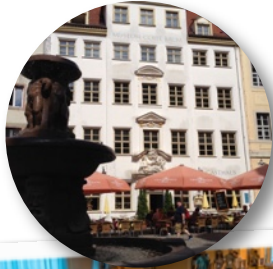


欧州キリスト者の集いを通して、多くの教職者の方々や兄弟姉妹の分かち合いに触れることができ、互いに励まし合い、祈り合うことができました。まさに、イエス様との美しい関係を体験する機会をありがとうございました。

これからも欧州に在住されておられる方々との主にある交わりを深め、互いに励ましあい、共にみ言葉に養われて、成長して行きたく願っております。



「イエスよ、わたしたちは、ひとつになりました。互いに仕えることで、ひとつになりました。兄弟がひとつになることはなんと楽しく美しいか、それは主が命の祝福を命じられたから。」アーメン



祈る力  
ペコン倫子  
パリ・プロテスタント日本語キリスト教会



ドイツ・ライプチヒで行われた在欧日本人キリスト教徒の集いに神様が、私と息子を導いて下さったことに心から感謝します。また、この素晴らしい会が無事に開催できるよう、祈り、働いてくださった主教会の皆様、並びに当日ボランティアでサポートして下さった全ての兄弟姉妹に心からお礼を申し上げます。天におられる主の恵みが注がれたことにハレルヤ！

私は、クリスチャンホームに生まれ、育ちました。日曜日に教会に行くことは、私たちの家庭のカレンダーの根幹にあることでした。この天地を創造なさった神様が、全てをご存じだと思っているのに、現在生活しているフランスのディジョンで教会に行くことを守れていません。フランス語で聞く説教が完全に心に入らないという理由もありますが、だんだん、教会から離れ、神を忘れることの多い日常でした。



そんな中、昨年5月、私の当時12歳の息子が3階から転落するという大事故が起きました。

いつもと変わらない日常の中、突然、その悲劇が私の視界に入りました。発見したのは私でした。足が震え、呼吸ができなくなりました。まだ、息があった息子は、救急車で病院に運ばれました。呼吸困難になった私も同じ病院に運ば



れました。第一報を伝えにきた医師の言葉、一つ一つは、私を恐怖のどん底に落としました。その夜の手術を待っている時間は、人生で未だかつて経験したことのないほど苦しい間でした。ただ、ただ、神様の足元にひざまずき、聖書を開き、神様に祈るしかなかったのです。他のことは、余りの恐怖のために何もできませんでした。



トーマス教会

朝を迎え、手術の結果を知り、息子が元のように生活できると知った時は、声に出ないほどの喜びでしたが、同時に啞然としました。私の目の前で神様が、私に与えたものを奪い、そして、新たに与えられた。

神様は、私に2度、息子を与えた。。。このことを深く考えるようになりました。今、私の周りにある一切のものは、神様から与えられたものであり、神様はいつでもそれを奪える。神様の力をもの凄く感じるようになりました。

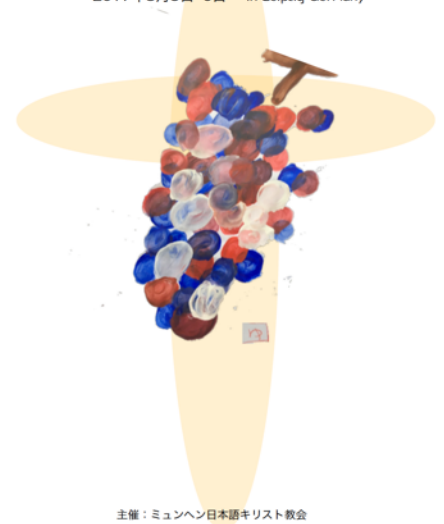
そんないつも、そばにおられる神様と会話することが、“祈る”ということなんだと、今回の集会で牧師先生の説教や分科会での同じグループの皆さんの証しで、また、学ぶことができたことが、とても嬉しいです。ビジネスと信仰生活というテーマの分科会に参加された兄弟姉妹の皆さんから、苦しみ、悩む際に祈りにどれだけ救われたかの証しがありました。この小さな無力な私が、手を合わせて、主にあって祈ることで、私は神様にゆだね、導かれる道が与えられている。ここに神様の溢れるばかりの愛を感じます。ハレルヤ！



第34回 ヨーロッパ・キリスト者の集い

— 宗教改革 500 周年 — キリストが内に生きる

2017年8月3日-6日 in Leipzig Germany



主催：ミュンヘン日本語キリスト教会

主において生き、生かされる

若者の姿

櫻井零

オランダ南部日本語キリスト教会



2017年、8月3日より6日にかけてドイツ、ライプツィヒにて行われた第34回ヨーロッパ・キリスト者の集いに参加しました。それは好天にも恵まれ、素晴らしいものでした。

私は2016年に信仰に導かれ、受洗。その直後に行われた前回の集いに参加する恵みにあずかり、今回の集いへの参加は2回目でした。

会場のホテルには欧州各国の日本語教会や集会より、また日本の各地よりたくさんの方が集まっています、プログラムもたくさんのも

のが準備されていました。私は今回はじめてCSの奉仕をさせていただきました。(といっても、奉仕自体はじめてで何も分からず、少しのお手伝いをさせて頂いた程度ですが。)



緑豊かなライプツィヒ市街

2日間参加させて頂いたCSのプログラムは素晴らしく、奉仕者の情熱と献身、そして今を一生懸命に生きている子どもたちの命の輝きに心を打たれました。欧州の各地で奉仕されている牧師の方々の説教も、この日の為に用意されたのであろう熱のこもったものばかりで素晴らしく、分科会も魅力的なものばかりで、選ぶのに苦労しましたが、参加できた会は良い出会いや再会にも恵まれました。



トーマス教会のステンドグラス

2日目には旧市街に出て、東西ドイツの統一、冷戦の終結の発端となった祈りの集いが行われていたニコライ教会を訪れたり、ルターが説教をしたりJ.S. Bachが働いたトーマス教会での讃美集会にも参加することができ、ライプツィヒが持つ、分厚い歴史にほんの少し触れることができたような気がしました。

そして土曜の夜にはユースの証し会を聞きに行きました。若い人たちの純粋な信仰と、彼/彼女たちの人生の歩みは眩いほどに光輝いて見えました。キリスト者の親を持ちながら、去年ようやく信仰をもてた遅滞きのボクにとっては、もう2度と10代や20代の多感な時期をイエス様と共に過ごすことは出来ないの、なんだか彼/彼女たちが少し羨ましくも思えました。それほどまでに彼/彼女たちの生きる姿には美しいものがありました。

6日の日曜日には主日礼拝が持たれ、矢吹先生の大変素晴らしいお話を聞くことが出来ました。礼拝後の食事が終わると、集いは終了。それぞれが置かれている場所にまた戻って日常がはじまりました。出会えた方々、集った方々とのしばしのお別れがとても寂しかったです。



今回も素晴らしい時間の連続で、集いの期間中はずっと感動のうちにあり、今回も本当にあっという間に終わってしまった、という感じです。次回はエディンバラ。ここにまた集い、私たちの日本語で、皆でともに主のみことばに心を傾ける時を楽しみにしています。大会の準備にあたられたミュンヘンの皆様、素晴らしいお話を語って下さった先生方、ご奉仕された皆様、出会えた方々、本当にありがとうございました。そしてまたすぐにお会い出来ますことを期待しています。



## 初心にもどりたい

佐川理恵

Korean Reformed Church of the Netherland

初めのころの信仰を取り戻したい。いったい、何が心を遮ったり妨げてしまったのだろう。貧しい学生だったころ、食べ物は少なくても、み言葉を信じて生きていた。貧しかったのに、なぜか、幸せだった。お腹はすいていたけれど。聖書を第一としていた。何か、何かよくわからないんだけど、純粹だったなあと思い出す。今でも神様を信じる以上の大事なものは無い、これは変わっていないのだけれど、、、

いったい、何がもんだいなのかな？聖書を読む時間が減った？老眼のせいでおっくうになった？証しに触れる機会が減った？6年ぶりくらいに修養会に行くと、中高生の証し会を覗きにいった。奉仕に一生懸命だったころの自分を思い出したかった。



10代の証しは思い当たることが多く、素朴で素晴らしい。中高生会は、続けたかったことなのに、諸事情で続けられなかった、、、確かにフルタイム社会人になって聖書関係の集まりにはなかなか顔を出せなくなってしまった。

自問自答「あなたの問題は何か？問題がなければ成長もあり得ない。」

2015年の夏に膝の半月板を損傷し、2016年の2月にやっと手術となった。それ以来11年間勤務したS社では働くことができなかった。でも、どうやって私はN社に行くことになったのだろう？？いつの間にか違うところで働いていた。会社はモスリムの人ばかりだった。誠実で、真面目な人たちが好感がもてた。でも、やがて通勤中交通事故に遭い、さらに3か月、家で寝たきり&リハビリの生活だった。毎日頭が痛かった。歩く練習で精いっぱいだったので、頭を打ったことに気が付いたのは2016年の暮れだった。

気が付いたら違う会社で働いていて、事故前後くらいからの記憶がとてまあまいだ。記憶も悪いし、集中もかなり悪い。年明けてスキャン、損傷もないし、アルツハイマーでもなくてほっとしたけれど、脳震盪の後遺症がありますからこちらリハビリを受けてくださいと言われた。

リハビリがスタートしたのはなんと5月だった。もっと早くすべきだった。仕事が忙しいのでなかなか始められなかったのだ。ちょくちょく仕事のミスをした。それで、気が重くて仕事に行くのが毎日嫌だった。通勤電車のなかで胃がいたかった。6月にとうとう決定的なミスをしてクビになった。この時は何かとても恐ろしくて体がぶるぶる震えた。神様に祈って耐えた。

次の朝、市内のチャペルへ行き、社長の心が癒されますように、とひたすら祈った。数日して、心が楽になっていった。何か



分科会で隣人としてのモスリムの話を聞く に来て、Aさんのモスリムの話、そして、シスターソハラからモスリムについての本をいただいて読み、神様が私をあの会社から離して下さったのかもしれないと思えるようになった。夏の間は郵便配達をしているけれど、とても感謝しつつ、喜んで仕事しています。

そうそう、中高生会の奉仕のことについて、思うのですが、こちらの奉仕をすると普通の集會に全く出られません。食事休憩もすべて彼らと共に行動するので、(このことは大事なことだと思います)普通のプログラムには出られず、でも自分自身もお話を聞いて、靈的に養われたい、そう思うのですよ。でも2年続けて、これは問題だなあ、と思いました。直接の原因は費用と時間がなくて3年目はいけなかったのですが。これは何か奉仕の方法を考えるべきだと思います。



## 聖書で読み解く絵画

岡山敦彦

大分めぐみ教会

この度はヨーロッパキリスト者の集いに参加し、分科会で私の著書「信仰の眼で読み解く絵画」から北方ルネサンス画家ブリューゲル、デューラー、クラナハについてお話しできたことを感謝しています。

分科会には20数名の方たちが集ってくださり、私の解説に熱心に耳を傾けてくださり心から感謝しています。ブリューゲルはフランドル地方に住み、晩年はスペインのフェリペ2世の激しい迫害に立ち向かうキリスト者の姿を話しました。



ブリューゲル「バベルの塔」

デューラーはニュルンベルクにいて、彼の代表作「四人の使徒」について詳しくお話ししました。彼が聖書を熟知していたことを彼の絵画からもうかがい知ることができます。クラナハはルターの親しい友人でルター夫妻の肖像画も多く描いていますが、キリスト者としてはあまり模範的ではありませんでした。そのような話をさせていただきます。

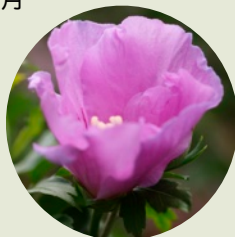


分科会に出たかったけれど出られなかった方たちの中で、本を6冊買ってくださり、分科会で使ったパワーポイントを後で送った方もあり

ました。また、いろんな方たちともキリスト教絵画について話すことができました。

今年はルターの宗教改革500年の記念の年です。ベルリンからライプティヒに行く途中ヴィッテンベルグにも立ち寄りました。多くの観光客で混雑していました。ルターハウスで彼の働きの一端を学ぶことができました。改めてルターの主にある偉大さを学びました。このような機会を与えてくださった主に感謝しています。

私は、来年教会の牧会を終え、4月からは年に一度ぐらいはヨーロッパの諸教会を巡回する計画を持っています。また、必要ならばお招きくださり、声をかけてくだされば幸いです。手弁当で行きます。

胸深くに打たれること  
古坂令菜 (フルサカ レイナ)

この度、大分の岡山敦彦 牧師先生より、ミュンヘン日本語キリスト教会を通して、キリスト者の集いに参加をさせて戴き、大変感激を致しました。キリスト関係の集いは初めて全く白紙の状態に参加させて頂きました。

まず、ヨーロッパに沢山の日本の信者さんがおいでになるのに驚きました。でも色々なお話を伺って、牧師様達が真摯な態度で真剣にお話をされるのを伺い、なる程と感嘆致しました。時折、お話を伺い胸深くに打たれる事がございました。

聞き手を此処まで感動させるのは、心からお話下さっている事の実証だと思います。また、信者さん全てが、暖かなお心をお持ちということが、一步踏み込んだ所から会の終わりまで感じる事が出来ました。なんと素晴らしいことでしょう。

これがキリスト様の素晴らしさと、それを信者さん達にお伝えに成られる牧師様達の優れたお力、その教えを正しく受けられていられる信者さん達に感動を致しました。

こんなに素晴らしい機会が得られ、心深く感謝致します。有難う御座いました。心より御礼申し上げます。拙文ですが、真実の感動を書かせて戴きました。



## 主の愛に生かされて

富永幹恵

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

ルター宗教改革500年目の年にルターゆかりの地ライプティヒで修養会に参加出来たことを感謝します。今回も素晴らしい準備がなされ恵み溢れる4日間でした。

特に分科会はとても良かったと思います。またバッハが長く音楽監督を務めマタイ受難曲が初演された聖トマス教会での礼拝、コーラスは忘れがたいものとなりました。主催教会、諸教会の先生方、携わった愛兄姉方ありがとうございました。このような修養会で懐かしい方々との再会や新しい出会いは何よりの喜びです。

「人の力ではなし得ないことでも、キリストの力により頼み、主の愛に生かされて可能とさせて頂ける」とのメッセージを会全体から頂きました。

これからも主に期待し、主の内に生かされていけるよう祈りつつ歩みたいと思います。

分科会を通して教えられたこと

富永重厚

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

ドイツ・ライプチヒでもたれた2017年のヨーロッパ・キリスト者の集いでは、ルターによる宗教改革、500周年を覚えて「キリストが内に生きる」とのテーマが掲げられました。

今回は日本からも多くの方が参加され楽しく又嬉しい再会の姿が多く見られました。早天祈祷会と3日間の講演、そして最終日の主日礼拝を通してみ言葉から今回も大きな恵みを頂きました。



特に今回は16の分科会が設けられ合計3回で3時間の時間が与えられていました。私はその内の「ビジネスと信仰生活」の担当者として準備をさせて頂き、

12名の参加者と共に学ぶことが出来大きな励ましを頂きました。

ここでは少しこの分科会を通して教えられたことを分かち合いたいと思います。

まずルターの宗教改革の歴史的意味を確認させて頂きました。

ルターの聖書翻訳を通して「天職Beruf(Calling)」つまり世俗の職業は神の召命であるという意識が明確に与えられました。

そこからカルヴァンの世俗内禁欲の精神、即ちパウロの手紙にあるように、他のあらゆることを忘れひたすらゴールをめざして走るという「資本主義の精神」を生んだということを宗教改革500年の今、もう一度思い起こす必要があると示されました。そして資本主義はひとたび覇権を握ると、この禁欲の精神を捨て去り「精神の無い専門家」「心情の無い享楽人」を生み出して行くということはドイツのマックス・ヴェーバーが100年前にすでに予言している通りです。まさに現在私たちが目にしていることです。

次に「ビジネスと信仰生活」を考える際まず「私たちは何故生きているのか」との問いを常にしなければならぬことを学びました。そこから初めて「ビジネスとは何か」「何故私たちは働くのか」という問いかけへの答えが出てくるからです。

聖書ははっきりと私たちはイエス・キリストのご栄光を現すために生きていると教えています。(イザヤ43:7、マタイ6:32・33、コリント第二5:15)そして苦しみや矛盾の多い日常の中に「神の国」はある、

つまり生活こそが教会であり主と出会う場所であることを学びました。

これらのことを学んだ後、ビジネスの場である企業の問題に目を向けました。企業の場合競争社会の中で他人が自己を評価するのであり、その評価は相対的評価であり絶対的評価では無いことからくるさまざまな問題と直面します。評価されない場合必要以上に自信を無くし、場合によっては精神的に追い込まれてしまいます。逆に評価された場合傲慢になり自分を見失ってしまいます。このような時クリスチャンはいつも聖書のみ言葉から信仰によって励まされまた正して頂きます。



幸いなことに日本の企業でも最近単に仕事ができるということではなく、他者がどんな思いを持っているかを想像する力すなわち「人間力」を重視する傾向が出てきました。

そして今回のテーマである「キリストが内に生きる」との意味は、「土の器」に過ぎない私たちに生きる意味と仕事の意義を与えて下さるのは、その「土の器」に生きていて下さるイエス・キリストであるということです。ビジネスを成し遂げる力は「土の器」である私たちから来るのではなく、その中にある宝即ちイエス・キリストの測り知れない力から来るのです。(コリント第二4:7)ですから「土の器」である私たちは「無きに等しい者をあえて選びたまう」神を賛美して弱さを誇りつ

つ、一心に前に進んで行きたいと願うのです。



イエス・キリストの力は弱さの内に完全に現れるというのは聖書を通して一貫して教えられていることです。

私たちが「土の器」と

しての弱さを自覚するとき「外なる人は衰えても内なる人は日々新たにされる」のです。

まさに、無きに等しい者をあえて選ばれる(コリント第一1:28)また弱さを誇る(コリント第二12:9)という聖書の一貫した教えの意味がここにあります。

ビジネスの場においても、ここにきてようやく他者の痛みや思いを理解する力即ち「人間力」の大事さを意識し始めた日本において、これからますますみ言葉と信仰に立つクリスチャンが活躍できる時代が来ているのではないのでしょうか。

以上簡単に分科会「ビジネスと信仰生活」を通して教えられたことを中心として証させて頂きました。



## 生涯忘れ得ぬ思い出

マイヤー・マルチン

スイス日本語福音キリスト教会牧師

「キリストが、私のうちにおられるのです」(ガラテヤ2:20)と言う素晴らしいテーマと同時に、素晴らしい会場とプログラム、そして、何よりも素晴らしい交わり…。

今年の第34回目の「集い」は、恵みに富んでいました。心から感謝しております。特に感心しましたのは、比較的小さな実行委員会だけでこれだけの大会をオーガナイズし、340人を越える参加者のためのカンファレンツを実施するという実行力!! ミュンヘン日本語キリスト教会の皆様、安藤先生ご夫妻、本当にご苦労様でした。神様の豊かな報いと祝福がありますように。

ライプツィヒ市の中心は、18年ほど前に初めて訪問した時とは、比べ物にならないほど変わりました。当時、とても住めそうもない、外壁が崩れ落ちたりして、みすぼらしく傷んでる建物ばかりの町並みは、まるでそれが嘘であったかのように立派に生まれ変わりました。本当に驚きました。

あの有名なトーマス教会での賛美礼拝は、言うまでもなく集いのハイライトの一つでした。宗教改革500周年記念にあたって、日本語で礼拝をささげる恵みが与えられたことは、一生涯決して忘れられない素晴らしい思い出になりました! 感謝、感謝。



## 子供たちとの交わりのなかでの祝福

トムセン千香子

スイス日本語福音キリスト教会

初日と最後の礼拝以外は私はほとんど子供達と過ごしていました。

ですから先生方のお話はあまり聞くチャンスも無く分科会には出席できませんでしたが、子供達やCSの先生方とのお交わりの中で大きな祝福を受けました。

毎日朝から元気いっぱいのお友達のパワーに圧倒されつつも幸せな時間を過ごしました。

ライプツィヒの街での時間もトーマス教会の礼拝を始めとてもいい経験をさせていただきました。この集いを支えてくださった神様と主催教会であるミュンヘン日本語キリスト教会の皆様感謝いたします。



## スカイプでの聖書勉強が楽しみ

トムセン・ヨハナ

スイス日本語福音キリスト教会

今年のライプツィヒの集いも、とてもいい3日間でした。色々ユースと神さまについての深い話ができて嬉しかったです。

証会の時も本当に心があたたまりました。神様ってそれぞれの子供にも色んなふうに語っていることがよく分かりました。

これからも集いのユースとのスカイプでの聖書勉強を毎週楽しみにしています。



## 自分が恵まれたCS

平田仁美

ミュンヘン日本語キリスト教会

主人の赴任に伴い、ミュンヘンにやってきたのは2015年の秋。それに先立つ2015年夏、ミュンヘン日本語キリスト教会の安藤牧師と東京でお会いする機会があり、その時に先生から「2017年に、キリスト者の集いをミュンヘン日本語キリスト教会が主催するのです」と伺いました。

私たち夫婦がミュンヘンにいるちょうどその時に、そんな大きな会を主催することになっているとは…私たちがミュンヘンに行くことになったひとつの理由がそれなのだろうか？何かしら自分にもできることがあるだろうか？ぼんやりとそう思ったことを覚えています。

その1年後には、自分がCSの担当をすることが決まっていました。積極的に「是非CSがやりたいです！」と名乗りを挙げた訳ではありません。例えばバス会社やホテルとの交渉など、英語やドイツ語が求められる奉仕は自分には出来ないし、CSの連絡くらいなら出来るかな～とふと漏らしたことが始まりで、あれよあれよと言う間にCS担当になっていました。

日本にいた頃、子どものキャンプのスタッフをしたことはありましたが、教会でもCSの奉仕をしていました。しかし、企画などの準備はしたことがなく、ヨーロッパには来たばかりで集いの参加は1回のみ、それも部分参加…と、なんとも心もとないCS準備担当です。フランクフルト日本語福音キリスト教会の矢吹育代先生と、ケルン・ボン日本語キリスト教会の佐々木良子先生が、それぞれの教会に赴任されて間もない中、CS準備委員の重荷を共に担ってくださいました。

最初のCS準備委員のスカイプミーティングを持ったのが集いの1年前の8月。それから何度もスカイプミーティングを重ねました。10月末には、まさかの腸閉塞で緊急入院・手術なんて出来事まであり、教会の皆さまはもちろん、良子先生や育代先生にもずいぶんご心配をおかけしま

した。（今はもうすっかり元気です）

3月の申し込みが終わり、CSのご奉仕をしてくださる方が何人も与えられ、子ども達も20名を超える申し込みがあり、感謝の中で準備を進めました。ご奉仕の思いがながらも、健康上の理由などでキャンセルされた方もおられました。しかし「お祈りしています」との言葉にますます励まされました。

集いが近づくと、事務的な作業や細々とした準備が増えました。何度も「早く、集いの終わった時点でタイムスリップしたいなあ～」と思いました。

しかし、タイムスリップしなくて良かった、と今は心から思います。実際に集いが始まると、私は楽しくて、恵まれて、ただただ感謝な4日間を過ごしました。

スタッフの皆さんはそれぞれに賜物を用いて、現場でどんどんCSを楽しく豊かな時間に導いてくださいました。神様が必要な人材を備えて、その賜物を用いてくださったのだと思います。



子ども達は4歳～11歳という幅広い年齢、そして日本語があまり得意でないおともだちもいましたが、みんなめいっぱいCSを楽しんでくれました。何よりも私が感動したのは、子ども達がみことばを一生懸命に受け取っていたことでした。改めてみことばには力がある…と教えら

れました。共に奉仕をする中で、CS奉仕者の皆さまと主にある絆が深まったことも感謝でした。何人もの方に「ずっとCSで大変ですね」とご心配いただきました。私はそのたびに、そのお心遣いに感謝しつつも、心の中で「いやいや、CSでたくさん恵みをいただいている、もったいないくらいなのですよ～」とっていました。

集いの間中、会場のホテルには神さまの祝福が満ち溢れていたと思います。CSだけでなく、講演や分科会、そしてバスでの移動やトーマス教会での賛美集会、すべてのうちに神さまの守りと祝福がありました。それは、多くの方がずっと祈ってくださったその祈りに、主が応えてくださった結果だと思っています。



## 信仰のルーツを考える 平田卓也 ミュンヘン日本語キリスト教会

集いの参加は今回で二回目、今年は主催教会の会員としての参加になりました。個人的に興味深かったのは、特別講演の後の質疑応答の中で言及のあった、ルター派と改革派の違いです。長老派出身の者として、そこはもう少し時間をとりたいところでしたが、宗教改革500周年を記念するこの年に、自分たちの信仰のルーツ、またプロテスタント教会の現状について考えるよいきっかけになったと思っています。

## 神の臨在を感じた賛美の午後

工藤篤子

工藤篤子ワークショップ・ミニストリーズ

8月4日（金）、バッハが長年カントールを務めたトーマス教会をお借りして、「賛美の午後」（賛美礼拝）の時を持つことが出来たことは大きな喜びでした。準備は2年前から始まりました。

2008年、ルターの宗教改革の発祥地となったヴィッテンベルクでTsudoi25が開催されました。そこで、私たちはルターが1517年に「95か条の提題」を打ち付けた城教会で礼拝を持たせていただいたのですが、その礼拝のために、急遽12名によるグナーデン・アンサンブルを結成し、宗教改革時代の賛美をささげました。



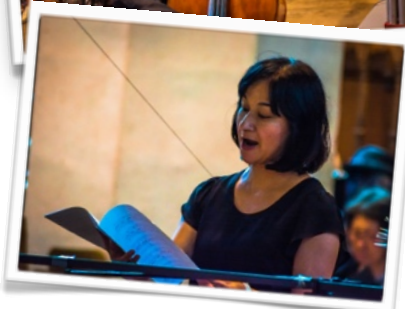
今年のプログラムは、あの時に賛美したモテット（合唱曲）から、ハインリッヒ・シュッツ Heinrich Schützの「それ神は世を愛し」（ヨハネ3:16）

と、ヨハン・ワルター Johann Walterの「主のことばのみが」を入れる予定を立て、かねてから参加を考えて来られた活水聖書学院の聖歌隊の皆さん（15名）が、2年間の練習を積んで日本から参加して下さったのです。

また、ライプツィヒの音大で教会音楽を学ばれ、8月からライプツィヒ近郊の町の教会にカントールとして就任された指揮者の小山田薫さんが、実に的確な合唱指導をして下さいました。おかげで、3回の練習で難しい合唱賛美がまとまり、60名以上の聖歌隊、器楽の方々を合わせると総勢70名で、声と音をひとつにして賛美をささげることができました。

「賛美の午後」では、オルガンによる前奏、間奏、後奏、ソロ、デュエット、合唱、ミラノ賛美教会の内村伸之牧師より「はじめの愛に戻れ」と題して語られたメッセージ、会衆賛美によるプログラム全体に聖なる神を感じ、キリストのみからだの共同体として、真心からの「礼拝」をささげさせていただいたのではないかと思います。

個人的には、前奏のバッハのオルガン・コラール「来てください、聖霊よ、主なる神よ」（BWV 651） Komm, Heiliger Geist, Herre Gottで、神の威厳と聖霊の降り注ぎを感じ、メンデルスゾーンの詩篇95篇からのデュエット賛美「来たれ、私たちは主の御前で拝し、ひざまずこう」 Kommt, lasst und anbeten und knien vor dem Herrn!を聞きながら、礼拝への招きを実感し、涙が溢れました。その後は、常に神の臨在を感じる素晴らしい礼拝の時となりました。神の御前に出させていただくために、最初の備え（今回の場合は、前奏と招きの賛美、もちろん、その前の霊的準備も含めて）がいかに大切かを思わされました。



## 主の憐れみで

岡本明美

大阪 単立 チャペル・こひつじ

ドイツ、ライプツィヒで行われるヨーロッパ・キリスト者の集いに参加しようという事で昨年12月から私達3人（森口、太田、岡本）が集会に観光を加えて10日間のドイツ旅行を計画、準備を始めました。あれから8カ月、祈り会もして楽しみにしていましたが、直前に止むを得ない事情で太田さんがキャンセル、森口さんとの2人旅となりました。集いの感想は一言、何もかもとても素晴らしかった！ 失敗もいろいろあったけどたくさんの方々と知り合えて、楽しく有意義で、参加出来てほんとに良かったです。



### ●ライブツィヒまで

フランクフルト空港で着陸時の私の耳の詰まりが元に戻らず異常に痛む中、2人とも油断、不注意が重なりライブツィヒ行きの飛行機に乗り遅れてしまいました！ 結局次の便の運賃を支払い、10時発に乗り、夜中12時に無事H4ホテルに到着。とんだハプニングでした。翌朝は主の恵みの雨。2人でゆっくりデポーションし、受付け時間まで昨日の疲れを癒すことが出来ました。

### ●講演



早天祈禱会のお話しも含めとても良かったです。「キリストが内に生きる」、個性豊かな先生方のメッセージ、み言葉、素晴らしい学びの時でした。日本に帰って講師の先生方のお顔をだんだん忘れるのでホームページで確認できるのは嬉しいですね！

### ●分科会

1番 「宗教改革500周年と私達」

日本でルター関連の予備知識はしっかり付けていたつもりでしたが橋下先生は宗教改革の背景や1人の人間としてのルターについて話して下さいました。先生の優し

いお声に疲れが癒されました。（時々うとうとしてしまい3回目は後ろの席でした）

### ●讚美の午後

数年前に宗教音楽を歌う合唱団に入りバッハが好きになった事からライブツィヒにぜひ行きたいと思っていました。そして今回トーマス教会での聖歌隊のご奉仕。一生に有るか無いかの機会を頂き日本で練習もしっかりして臨んだつもりでしたが、うかつにも当日飲み水を持っていくのを忘れてしまいました。自販機など無い！、喉を十分に潤せないまま歌う事となり情けない思いでしたが主の憐れみで無事歌い通せたこと感謝でした。



### ●自由時間



集会3日目、午後の自由時間にトーマス教会でのバッハのオルガンフェスティバルに本園万子さん、増谷菜穂子さん、愛ちゃん、櫻井零さん、佐々木先生の6人で行きました。上階から降り注ぐ重厚なオルガンの音色、バッハの弾いたオルガンを見上げ幸せ感に浸りました。トラムにも乗れ、楽しく話しながら帰った事忘れられません！

### ●祈り会

早天祈禱会で祈り合ったことも良い思い出です。ヨーロッパ各地に大、小、さまざまな日本人クリスチャンの集いがあることを知りました。日本と同様にいろいろの問題も抱えながらも信仰を深めておられる姿に励まされ、私も海外の皆さんに目を向けて祈らないといけないなと思わされました。

最後にこの素晴らしいヨーロッパ・キリスト者の集いへ参加させて下さった主に心から感謝します。また御心なら次の機会も与えて下さいと祈って行きたいと思っています。



## 初めての集いに感動したこと

田中孝明

## デュッセルドルフ日本語キリスト教会

今回初めてヨーロッパ・キリスト者の集いに参加しました。集いの主催者牧師である安藤先生ご夫妻とは1999年以来、ドイツ・デュッセルドルフ市の隣町メアブッシュ市で自宅が近くであったことやお互いの子供達の幼稚園が同じであったことなどを理由に10年間家族のお付き合いをさせていただきました。2009年にミュンヘンに移られてからもミュンヘンへの出張時に2度ほどお会いいたしました。

今年初め、安藤廣之先生がデュッセルドルフに来られた際に今回の集いがライプツィヒであることを知りました。デュッセルドルフ日本語キリスト教会とご縁を持たせてもらったのは実はその時からという新参者です。聖書には若い頃から関心がありましたが、そのようなことは安藤先生にも初めの10年間は一切話していませんでした。仕事が忙しくそれどころではなかったというのがその理由のひとつです。

仕事でドイツに赴任したのは1988年です。以来ドイツ在住です。ルターとバッハには昔から深く関心を寄せていました。それで1991年、ベルリンの壁崩壊後まだ日も浅い頃、東ドイツのかおりが残る東部ドイツをルターとバッハゆかりの地を訪問したいという思いに駆られ、家内といっしょに車でいくつかの町々を回ったのです。アイゼナハを皮切りに、エアフルト、ヴァイマル、イエーナ、アイスレーベン、ハシ、そして最終目的地、ヴィッテンベルクを訪問しました。なぜあの時ライプツィヒを訪問しなかったのか記憶が定かではありません。限られた時間内での小旅行でしたから、おそらく時間的理由からだったと思われる。その時以来、ライプツィヒへの訪問は自分の深層心理が常に求め続けていたようです。

今年6月の終わり頃、ライプツィヒでの夏の集いのことが急に思い出されてきたのです。集いが間もなく始まるとうるような時期に申し込みはおそらくダメだろうなと思いつつも、心の声には忠実に従ってみようと思いつき安藤廣之先生と里佳子先生にメールを書きました。そうしたら同日、もし自分で宿泊先を見つけられるなら今からでも参加できます、との返事を頂戴しました。早速程近いホテルを予約し申込書を送らせてもらいました。

その10日後7月中旬に、「賛美の午後」での聖歌隊へのお誘いをいただきました。歌うことはとても好きで、地元デュッセルドルフ市では日本人男声合唱団に、またメアブッシュ市ではゴスペルコワイアで毎週練習に参加するのが生活の一部になっています。お誘いに即応し仲間に入れてもらうようお願いしました。しかも

プログラムによればバッハゆかりのトーマス教会で有名な曲の数々が歌えるということではありませんか。これは生涯の思い出になるかも、と高揚する心を抑えるのが大変でした。

8月3日木曜日早朝デュッセルドルフを出発し、5時間の道のりを車で飛ばし、午後2時30分からの合唱の練習には十分間に合うようにライブツィヒ入りすることができました。

新参者ですから会う方会う方ほとんどが初めての方々です。到着した初日は緊張の連続でした。でも何か不思議な感じもしました。どこかですでに会っていたような不思議な感覚です。家族のような感覚といえ良いでしょうか。日を追うにつれて周りの空気が極々自然なものとなっていきました。4日目の最終日、別れる頃にはこの期間に声を掛け合うことのできた皆さんとも、また、声を掛け合うことのできなかった皆さんとも一大家族の兄弟姉妹になれていた自分がいました。感謝に堪えません。

全体集合の礼拝や祈祷会での牧師先生方のお話しはとても参考になりました。聖書の文言に基づいたお話しは自分を見つめ直すに良い機会となりました。謙虚な心で真理の言葉に耳を傾け、日々新しく生まれ変わっていかねばならないことを学びました。今が変革の時というメッセージにはハッとさせられるものがありました。

早天祈祷会の結びの小グループによる祈祷は美しい伝統と思いました。3回とも違った方々とグループを組ませてもらいました。祈祷前の短いコミュニケーションの時間でお互いを知り合え、絆を築けました。相手のことを思いやり感謝の気持ちで祈りを交換し合う伝統は実に美しいものです。

食事の時間がまた素晴らしかったです。9回の機会に私達夫婦は毎回新しい方々と隣り合わせで歓談させてもらいました。最初のテーブルでは家内が翌日から参加する分科会の座長の方が偶然横に座っておられました。すでに翌日のことがその場で準備されているようで神様の導きを感じました。別の機会のテーブルでは、後日当地デュッセルドルフで再会することを約束することになる方と繋いでいただくご婦人が横に座られました。そのご婦人との出会いがなければ可能とはならなかったアレソジなのでこれも神様の業のように感じました。最終日最後のテーブルでは、2日前の聖歌隊賛美でいっしょに歌わせてもらったお二人の音楽家の

方々と隣り合わせでした。歓談していくうちにおひとは郷里がいっしょと分かり故郷に思いを寄せるひと時の時間となりました。日本から来られたこれらお二人の音楽家の先生方とは、その後またばったり



会う奇遇がありました。解散後ライブツィヒを離れる前にとニコライ教会を訪問した日曜日の昼すぎです。何とニコライ教会近くの道端でばったりとお二人に会うではありませんか。実に奇遇でした。最後の最後まで生きた神様が今回の出会いのひとつひとつを祝福してくださっているようでうれしくなりました。

分科会が実に勉強になりました。「バッハ、信仰の音楽」に参加させてもらいました。4人の専門家の先生方がルターとバッハに関わる貴重な話を立派な資料とともに話してくださいました。音楽の第一線で活躍される専門家から伺えた深いお話しは骨身に染み渡ってきました。



体が二つあれば参加したかったもうひとつの分科会は「信仰の眼で読み解く絵画（ルターと同時代の画家たち）」です。この分科会の講師の先生が日本から持参なさった本の6冊全部を購入しました。これからじっくり読んでいきたいと思っています。

8月4日金曜日の「賛美の午後」は私にとってハイライト中のハイライトでした。聖歌隊の一員として一流の音楽家の方々といっしょにバッハゆかりのトーマス教会で賛美の演奏を捧げた感動は言葉に言い表わせません。プロの音楽家先生方が演奏なさる有名な曲の数々を近く

で拝聴できたことは神様からの贈り物でした。祈りの込められた空気が辺りを覆っていました。

今回の集いへの参加が初めてだったので過去の大会と比較することは私にはできませんが、今回のライブツィヒ大会は過去同様、大成功であったのではないのでしょうか。新参者たる一参加者である私の目には実に見事な大成功であったと確実に写りました。結果がそうであるためには、それ相応の原因があったに違いありません。その原因とはミュンヘンチームの3年間にわたる準備の誠意と献身です。準備実行委員会の皆様におかれては計り知れないご苦勞があったかも知れません。でもその苦勞が見事に報いられたこの4日間であったのではないのでしょうか。

ライブツィヒ大会の実現に向けてご努力されたすべての皆様に敬意を表します。そして心から感謝を捧げます。生きた神様を感じさせてもらった4日間でした。

この集いに欧州全土や世界から参加された皆様の上に限りない主の導きと恵みがありますように。

主のみ名により、  
アーメン



## 目から鱗のセミナー

Y.T.

### ウィーン日本語キリスト教会

第34回の集いではミュンヘンの日本語キリスト教会の方々に非常にお世話になりました。私は、ヨーロッパ・キリスト者の集いは、プラハ、ザールシュタインと続き今回で3回目の参加でしたが、特に今回は宗教改革500周年の年にあたりドイツのライブツィヒでの集いに参加できましたことは特別の計らい、恵みのように感じられました。

実際に参加人数は例年よりも多く300人近くに上っていると聞いております。そのためでしょうか、顔と名前が一致しない方も多く、はたしてこの人は誰だったかとエレベーターや廊下で首をかしげることも多々あり、礼に欠けるという意味では非常に失礼な態度に見えたかも知れません。

私は、実は4日前の31日には同ホテルに宿泊しております。そこを拠点に宗教改革所縁の地、すなわち、ヴィッテンベルグ、アイスレーベン、アイゼンナハなどを一人で巡っておりました。ライブツィヒからですと中央駅を中心にいずれも電車とバスで行くことができま

す。いずれの地も素晴らしいのですが、特にアイスレーベンにはルターの生家がある割には訪問される方も少なく、最後の家の近くの教会では静謐さの中にも何かルターの霊性の断片のようなものが感じられ、もっとも印象に残った場所の一つでした。



分科会は橋本昭夫先生の「宗教改革500周年と私たち」というテーマのものを受講させていただきました。有名なルターの95カ条の論題から始まり、アウグス

ブルクの信仰告白にいたるまでを概観致しましたが、ドイツ農民戦争に対してのルターの取った世俗の秩序を尊重する態度などが人気失墜の事態に繋がったことなど、ルターの神格化の危険性といったことを知り、まさしく目から鱗のセミナーでした。

あらためて、このような有意義な集いを企画され、実行されたミュンヘン日本語キリスト教会の方々に感謝の意を表したいと思います。

## いつか彼が大人になったとき

小田島修治、磨江

### デュッセルドルフ日本語キリスト教会

集いの最終日、分級から帰ってきた息子が私たちのところに戻ってくるなり、こう言いました。

「神様を信じている人は聖書を読むんだって。僕も自分で聖書を読みたい！」



息子は今年、小学校三年生になりました。新しい漢字をいくつも覚えていくうちに、今まで音でしか理解していなかったものにも漢字が当てられること、また、その漢字が他にもいろいろな言葉に使われていることを知り、今まで気にも止めなかった

ありふれた日常の中に、これまでとは違った感動や疑問を抱くようになりました。新たな興味関心や探求心が芽生え始めている時期のようです。そんな彼にとって、「自分で聖書を読みたい」、「自分も聖書を読んでいいんだ」と思った今回の体験は、まるで白黒で映っていた風景に「カラフルに色を塗っていいんだ」と思わされた出来事だったのだと思います。

親が子供を見るとき、心のどこかに「教えてあげなくてはいけない」という思いがあります。それは学校生活や家庭での教育においてだけでなく、教会生活においてもそうだったのかもしれませんが。

「僕も自分で聖書を読みたい！」

そう彼が言ったとき、私たちは今までの思いを改めさせられました。彼もまた、私たちと同じく神様の前で礼拝をささげ、神様を信じて生きていきたいと願う一人なんだということを思われました。

集いから帰ってきた翌日から、彼は聖書を読み始めています。「イエス様の御言葉とお話を書いてある新約から読んだほうがわかりやすいよ」とアドバイスしましたが、「ぼくは神様がこの世界を造ったときのことを知りたいの！」と言いはって創世記から読み出しました。

しかし、小学三年生が一人で聖書を読むには、やはり難しい言葉がいくつもあります。書かれた背景も知っているわけではありません。

「聖書を読んでみてどう？」

「う～ん、もう少し大人になってから読んでみようかな？」

「やっぱり難しいよね？」

というやりとりがしばらくしてありました。それでも、読みたいという気持ちはあるようでしたし、私たち大人でも、あのエチオピア人の宦官のように、導いてくれる人がいなければ、また、共に御言葉に向き合う人がいなければ、聖書を読み続けるのが難しいことは誰もが知っていることですので、今度は親の私たちと一緒に聖書を読むことにしました。

子供と一緒に聖書を読むという体験は、想像以上に感慨深いものです。ごちなく一音一音言葉を拾っていく息子。しかしそのごちない言葉は、とても心に響く言葉でした。

聖書を読むときに、聖書を勉強するものだとは思っ

てほしくない、というのが私たちの願いです。頭だけで聖書の御言葉を考えるのではなく、聖書で語られている生き方に親しみ、感動し、時には困惑し、不安になる。そういう心の揺れを感じながら、そのときに与えられた御言葉を噛み締めてほ

しいと願っています。彼が、キリスト・イエスの中にあって、御言葉の香りを聞き、味わい、人生をかけて御言葉を行なう人になってくれたらと願うばかりです。

いつか彼が大人になったとき、もしかしたら今回の集いのことは忘れているかもしれませんが、しかし、この集いを通して与えられた神様への思いが大きく育ち、年を重ねた私たちと共に神様の御前に立って礼拝をささげられていたら、それほど幸せなことはありません。

集いのために、ご準備とご奉仕をしてくださった方々と、神様の大きな恵みに心より感謝いたします。本当にありがとうございました。



## 仕える喜び

安藤みずき

ミュンヘン日本語キリスト教会

今年の実行委員として奉仕させて頂きました。色々な事務的なことで頭がいっぱいで、実はあまり御言葉に集中できなかったことが多かったです。

しかし、集いに参加して下さった多くの方々、特に輝いている子供たちや中高生を見て、「あ、こういう人のために私は頑張ってるんだ」と思い、自分のための集いじゃないんだと感じました。

仕える喜びを学べて、すごく感謝です。神様の栄光のためにこれからも色々頑張りたいです。



心通うユースの仲間と

## 小さいながらも変革が

塩見夫美子

工藤篤子ワークショップ・ミニストリーズ

キリスト者の集いに参加させていただき、本当に素晴らしい時間を過ごすことが出来たことを感謝いたします。準備をしてくださったミュンヘン日本語キリスト教会の皆様へ深く感謝いたします。

宗教改革500周年”キリストが内に生きる”との今回の集いのテーマの講演、祈禱会、分科会に参加し、密度の濃い日々を過ごし、私のうちにも小さいながらも変革が与えられましたことを、神様に感謝します。再びはじまる信仰生活におきまして、感謝と期待の中で歩めることを確信いたしました。本当に素晴らしい数日をありがとうございました。



## 前進する主の御業

坂野慧吉

浦和福音自由教会

この度のライブチッヒにおける「ヨーロッパキリスト者の集い」に参加を許され、多くの方々とお交わりの機会が与えられて感謝致します。安藤先生ご一家、高木姉、ミュンヘン日本語キリスト教会の皆さまのご奉仕を感謝致します。



今回は妻・聰子（ふさこ）と共に参加できてとてもうれしく感じております。私が最初に集いに参加した

のは、2001年のリヨンでした。その時にお会いしたの方々とお交わりができたことは大きな喜びでした。

その時には、まだ日本語キリスト教会がなかった国や町でこの16年間に新しく伝道がなされていることを実感して、とても嬉しく思いました。また、新しく牧師・伝道者が増しくわえられていることも感謝致しました。

浦和福音自由教会の会員の関谷典子さん、ご主人の転勤でドイツのシュトゥットガルトに住まわれることになり、ヨーロッパのニュースも最新情報で送ってくださることになると思います。私たちも、祈り続けて行きたいと思います。

## 嬉しかったこと、疑問に思ったこと

谷道まや

日本キリスト教団阿佐ヶ谷教会

とても豊かな4日間を過ごすことができ感謝しております。

①トマス教会での賛美の午後が素晴らしかったのはいうまでもありませんが、私は、分科会3に属し、三回に分けてパッハの音楽について深く学ぶことができたのが収穫でした。以前は分科会では、個人的な問題の分ち合いが主でしたが、今回は、特定のテーマに沿って深く掘り下げたお話が聞けてうれしかったです。

②それぞれの講師のお話は面白かったのですが、5日（土）講演4は苦痛でした。お話の仕方がこのような会にはふさわしくないと感じました。よかったのは、3日（木）の開会礼拝と、6日（日）主日礼拝の説教でした。

③5日（土）宗教改革講演は、講師の話し方が流麗すぎ、聞き取りにくかったです。日本から講師を呼ばなくても、ヨーロッパにおられる方で、宗教改革について、もっとかみ砕いてお話できる方があったのではないのでしょうか。

④6日（日）午前10時ごろ主日礼拝が始まるころ、あるヴォーカルの方が舞台上立って讃美歌らしきものを2曲歌われましたが、あの方は、日本の万座温泉日進館という旅館で歌を中心に伝道をしている歌手（泉堅氏）です。どなたにでも開かれている集いですが、中には、少し変な動機の人も含まれているようです。そのことが何人かの人の間で話題になりました。

⑤会場、食事行き届いたご準備に感謝いたします。私は杖をついて歩行する者ですが、はじめの部屋割りは、エレベーターから非常に遠かったのです。それを、ごらんになった工藤篤子姉が、部屋替えをしてくださり、大変助かりました。



## 私にとって「キリストが内に生きる」とは

安藤里佳子

ミュンヘン日本語キリスト教会伝道師

これから書くことに関しては今後集いの主催をされる方の一助にでもなれば、という思いがあります。私達夫婦は2000年から今年で18回集いに関わったことになり、私はその内半分以上は集いのCSや中高科で奉仕をさせて頂きました。その経験が少しでも主によって生かされたら感謝ですし、それでもいろんなミスもしてしまったなあ、というのが正直な思いです。



2014年に会場の下見をした時に私の中で「施設は堅固に、人材はフレキシブルに」ということが何となく頭にありました。今回の会場となった

H4 (旧ラマダ) ホテルは、中央駅からのアクセスはよくないのですが、施設はしっかりしているし、スタッフの印象もよかったです。ミュンヘン日本語キリスト教会での集い経験者は2015年からの者が大半で、人数も集い主催可能なぎりぎりであることが全ての準備の前提となりました。

私は事務局的な役割を担うだろうと思っていました。パソコン作業は得意ではないですし、新しいスキルを身につけるのにも時間がかかりますが、私に与えられていることは集い経験が長いということ。体力がないので、時間をかけてコツコツと準備を積み上げて行くタイプだと自覚していました。実際にはネットを使いこなせる委員達に圧倒されました。

講演や賛美集会については他の方が書いてくださると思いますので、今回の1つの特色である分科会を企画したことを少し分かち合います。メイン会場で全部のグループが分科会をするには他のグループの声が気になって、集中できないだろうと主人からずいぶん心配されました。そして与えられたのが「仕切り」を入れるという計画です。1年前の下見の時にホテル側との相談では何とか可能そうでしたので、その方向に進みましたが、実際にはいくつかの難題が出て来て、分科会のリーダーの方々に時間や場所の変更を何度も伝

えることになってしまい、申し訳なく思います。

申込の前に参加人数が予想できなかったことも、頭を痛めた1つでした。2015年の代表者会議でそれまでの集い繰越金が膨れ上がり、献金として本来の有効な用いられ方がされていないという話し合いがなされ、繰越金から5000ユーロを限度とする運用が承認され、その使用方法については主催教会に任せられました。

私達は250名を下回る参加者であっても開催可能な予算を立てましたが、実際には280名の定員を上回る340名以上の申込者があり、嬉しい悲鳴をあげたのですが、ホテルとの交渉やプログラムの再検討に相談を重ねました。繰越金5000ユーロの運用はそれを超えてはいけませんが、最後の主日礼拝での献金も予想がつかないですから、5000ユーロの利用ができなくなること(黒字になり過ぎること)もいけないだろうと、気を遣いました。

少ない人数の実行委員会でも当日ちゃんと流れて行くためには事前準備が不可欠で、なるべくシンプルにできること(例えば受付)はシンプルにするために、名札やしおりのシールを作りました。また今回は日本からの申込者が多く、集いが初めての方も多かったと思います。それで実行委員会は「旅行代理店」的な役割は果たしきれないことを、委員会の中でも話し合っていました。そんなわけで会場に集まるために自力でチケットを購入し、多くの方々 Трамに 乗って、15分歩いて到着というのは大変だったと思うのですが、雨が降らない様に主にお祈りしました。



いざ前日になって、ライブツィヒ入りした委員長からの報告。「レストランとカフェが工事中。」集い開催中に工事の音が響き渡るのかと嫌な予感がしてきました。「ビュッフェはFoyer (通路部分) で準備中。」そこで分科会もいくつかのグループがやる予定なのだが大丈夫だろうか。「部屋割りは目下(ホテル側が)作業中。明日の朝早くには受け取れるそうです。」本当に間に合うかしら?? 「施設は堅固に」を目指していましたが、準備過程でもこちらの連絡を会場(ホテル)スタッフがちゃんと把握していなかったりして、大丈夫かなあという不安が押し寄せてきました。

そして当日の朝ライブツィヒ入りした私達。なんと雨が降って来たではありませんか。そして自分が草案を作ったはずの「交通案内」を見ても、1年ぶりの



場所をうろうろとさまよってしまいました（元々方向音痴なので仕方ないのですが）。皆さんが傘をさして会場まで歩くという最悪のシーンが頭に描かれていましたが、実際は雨は午後には上がったのです。まさにハレルヤですね（逆に暑くなって大変だったとは思いますが）。



ホテルスタッフは、事前の心配が大きかったこともあり、期待以上に動いてくれました。シェフが優しい笑顔で、しかし目を光らせながら会場を歩き回っていて、ある部屋に椅子を10脚追加してほしいと頼んだら、シェフ自らと担当者（女性）がそれをすぐに運んでくれたのには、感動しました。

長くなってしまいましたのでそろそろ閉じたいと思います。私にとって「キリストが内に生きる」とはどういうことなのでしょう。集いのためにパソコンとにらめっこの日々。事務作業に追われる私の内にキリストが生きて下さっているのだろうか？しかし「霊的なこと」と「事務的なこと」は2つの別のことではなく、雑用をしながらも私達は主に叫びます。勿論静まって祈る時も大切です。土曜日夜の講演で、「宗教

的」な鎧をかぶった不信仰や肉のなものへの警告を与えられました。自分の中にある表面的な「キリスト教的であること」は主によって容易に暴露されてしまいます。軽率で不信仰な私の意見の数々も忍耐を持って受け止めてくれた委員のメンバー。ここにもキリストが内に生きる訓練があるんだなあとは思えます。

時間をかけてコツコツ準備をするタイプの私が最も苦手なことが、予期しなかった事態が起こること。トーマス教会での賛美集会が終わった後のバスの先発隊の担当者でしたが、2台のはずが3台待っていたバスを見て、パニックになってしまいました。ある方々には失礼なことも申し上げました。この場を借りてお詫びさせていただきます。



そんな不手際も失敗も弱さも罪もすべてを引き受けてイエス様が十字架に架かってくださったのでしょうか。だから私達集いを愛する皆で、十字架によって赦し愛し合いたいと思います。みなが一つとなるため、というイエス様の祈りが今も深く心に語りかけます。



## ライブチヒの「つどい」参加の恵み

岩井清

平塚福音キリスト教会

不思議な神さまの御導きにより、本来なら、日本からのメンバーとして参加すべきところを、私はパリ・プロテスタント日本語キリスト教会の一員として、今回の「つどい」に出席しました。二年ほど前から、その教会で短期の奉仕を依頼されておりましたが、ちょうど「つどい」の時期に重なるよう、パリ派遣が許されたからです。

活水聖書学院から、聖歌隊応援のために渡欧した皆さまとも現地でお会いすることができ、喜びに溢れました。簡単と思っていた、フランスからドイツへの旅については、飛行機が一時間も遅れ、乗り継ぎが間に合わず、ミュンヘンで四時間も待機を余儀なくされたこともあり、八月三日のホテル到着が夜十一時近辺になってしまうというハプニングがあり、皆さまにご心労をおかけして申し訳なく思っております。



「つどい」では、多くの懐かしい聖徒がたに、久しぶりにお会いする喜びに加え、何ととっても、一生の思い出となる、聖トーマス教会での賛美礼拝が、強く印象に残りました。分科会でも、「バッハ、信仰の音楽～ムシカ・ポエティカ～」を選びましたが、そのバッハが長年オルガニストを務めた教会でのその礼拝には、どうも観光客も加わったらしく、相当大勢の会衆が参列して、ともに高らかに歌い、聖歌隊の賛美に心溶かされ、メッセージに耳を傾け、パイプオルガン演奏に感動しました。

良く準備された講演、食卓の団欒、写真撮影の様子など今もその情景が思い起こされます。聖日のご奉仕があり、遅く来て早く帰るという、落伍者的参加でしたが、神さまと参加者皆さまのいっばいの愛に包まれた二泊三日でした。

安藤先生はじめ、ミュンヘンの皆さま、ほんとうにありがとうございました。神さまからの豊かなお報いがありますように。

「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんとというしあわせ、なんとという楽しさであろう。」（詩篇百三十三篇一節）

## 極限で仕えるということ

高木真由美

実行委員長・ミュンヘン日本語キリスト教会

わたしにとって信仰とはイエス様と自分の間にあるもので、だれかにこの素晴らしいイエス様を伝えたいとか、他のクリスチャンのために、または一人でも多くの人にイエス・キリストを知ってもらうために何かしたいとか、そう祈ったり、具体的にそのために行動したりしたことはなかったように思います。私のように救われてから日の浅い者など、クリスチャンとして誰かの役に立つことはできないとも思っていました。

そんなわたしが、まだ一度しか参加したことのない「集い」の実行委員長を務めることになったのは、もう1年半以上前のことです。ミュンヘンの姉妹が「真由美さんがやったらいいと思う」と言ってくれました。自分にできるだろうかなどと深く考えず、その場であっさりお引き受けしてしまいました。始めてみれば、やらなければならないことは自分の想像を超えていて、自分の心と奉仕の量とのバランスがうま



く取れず、この役目を降りたいと思ったことも何度もありました。実行委員会がなんども持たれ、礼拝には集いの話し合いをしに行くようになってしまい、これでは何のために礼拝に行くのかわからないと思ったこともありました。

終盤になればなるほどやることは増え、今度は逆に辞めたいなどと考える暇もなくなりました。

それと同時に、仕事がいつになく忙しくなりました。

そこで学んだことは、極限でも仕えるということだったと思います。それまでの考え方は、「時間もあるし、やってもいいかな」だったかもしれません。ところが神様は時間も気力も極限の私に、それでも仕えるということを見せてくださったと思います。その極限は集いが終了するまでずっと絶え間なく続きましたが、最後に私が主から与えられたものの大きさははかり知れないものでした。この集いについてのことが始まってから終わりまで、すべてが主の大きな愛であふれていたことを思い、とても感激し、この恵みに感謝しています。